



やっぱり、家族っていいね。

**家族の日
家族の週間**

このコンクールは、こども家庭庁の「家族の日」
「家族の週間」の趣旨に賛同しています。



令和6年度

家族への手紙コンクール最優秀賞作品集



石川町青少年健全育成推進協議会

石川町教育委員会

後援：福島民報社、福島民友新聞社、町民ニュース社、夕刊いしかわ新聞社、石川町内の郵便局

【目次】

最優秀賞作品

「いなわしろのじいじへ」

石川小学校 一年 岩田 星来 1

「大きいじいじへ」

石川小学校 二年 相楽 葉月 2

「ママありがとう」

石川小学校 三年 十文字 未来 3

「母がくれる優しい言葉」

石川小学校 四年 長澤 優 4

「お兄ちゃんたち」

石川小学校 五年 相樂晃乃進 5

「ぼくの夢を応援してくれるお母さん」

石川小学校 六年 小林 穂希 7

「自慢のおばあちゃん」

石川中学校 一年 根本 彪正 9

「お母さんへ」

石川中学校 二年 國井 海鈴 12

「祖母はアーちゃん」

石川中学校 三年 金澤 怜也 14

「私の二人のじいちゃん」

福島県立石川高等学校 三年 吉田 彩香 17

優秀賞・優良賞入賞者

20

【家族への手紙コンクールの趣旨】

生きとし生けるものは、親から子へ、そして子から孫へ、古来からその尊い命が受け継がれ、現在に至っています。命を後世に伝え、命の大切さを強く認識し、家族愛を一層確かなものにするため、「家族への手紙コンクール」を実施しました。

いなわしろのじいじへ

石川小学校 一年 岩田 星来

じいじは、わたしにいつもやさしくしてくれた
ね。じいじのつくるとうもろこしは、とってもあ
まくておいしくて、わたしのだいこうぶつだった
よ。じいじに、ながいきしてねと、てがみをかい
たときに、「せいら、ありがとう。」とないてよろ
こんでくれたのがうれしかったよ。ころなになら
なかったらもっとながいきできたのに、じいじが
いなくなつてとてもかなしいよ。⁹³さいまでが
んばったじいじ、てんごくでゆっくりしてね。

大きいじいじへ

石川小学校 二年 相楽 葉月

わたしは、大きいじいじのはじめてのひまご。

「は月のランドセルを買うまで生きているんだ。」

と言ってわたしが大きくなるのをたのしみにして
くれていたよね。やさしくて、字がきれいで石が
大すきなじいじ。わたしが生まれたときのめい名
のかみを書いてくれたり、おくいぞめの石をさが
してくれたりしたと聞いたよ。ありがとう。

この前のべえじゅのおいわいがたのしかったね。

百さいのおいわいもしようね、じいじ。

ママありがとう

石川小学校 三年 十文字 未来

つゆのきせつに入りました。ママはお元気ですか。わたしは元気です。

学校の宿題で「家ぞくへの手紙」を書くことになりました。少しはずかしいけれど、ママに手紙を書くことにしました。

ママは、さいほうが上手で、お洋服を作ってくれることがありますね。二かいのさいほう部屋で作ってくれるシャツやスカートは、わたしのお気に入りです。学校の先生にもほめてもらいました。

ママは調理もとく意ですね。とくにわたしは、ママが作ってくれたたまごやきがすきで、おべん当の日が楽しみです。

お仕事がいそがしくて、夜も帰って来られない日もありますね。それなのに、そうじやせんたくまでしてくれて、ありがとう。わたしやお姉ちゃんをお迎えに来てくれてありがとう。この手紙を書いている今日は、お仕事で夜も帰って来ないからつたえられないけれど、直せつありがとうをつたえたいな。

母がくれる優しい言葉

石川小学校 四年 長澤 優

お母さん、いつもぼくをはげましてくれてありがとう。漢字コンテストで一問まちがえて九十八点をとったとき、ぼくはうれしい気持ちとくやしい気持ちだったよ。お母さんはテストを見て、「優君、すごい字がきれいだね。お母さんよりも字がきれい。点数もすばらしいね。たくさん勉強していたもんね。」と、字の上手さを一番にほめてくれたよね。

その言葉を聞いたら、ぼくの心は、まん丸になって「次こそはこのきれいな字で百点をとって、お母さんをもっと喜ばせてびっくりさせるぞ。」という思いが、どんどんわいてきたんだ。

ぼくが失敗したときに、お母さんは優しくはげましてくれるから、自信がついて何でもできるような気持ちになるよ。お母さんの言葉はすごいね。ぼくも、お母さんが失敗したときに「失敗は成功のもと」って言うてはげましたいと思うよ。だから、安心してね。

お兄ちゃんたち

石川小学校 五年 相樂 晃乃進

ぼくは、男三人兄弟の末っ子です。五歳年上の潤乃介お兄ちゃんと、二歳年上の信太朗お兄ちゃんがいます。二人ともぼくの陸上のししようです。二人は短距離選手で足がとても速く、いつも表彰台に乗っていてとてもうらやましいです。ぼくはそんな二人を見て陸上を志しましたが、なかなか速く走れません。どうしたら速く走れるのか潤乃介お兄ちゃんに聞いてみたところ、「まだ速く走ろうとするな。まずはきれいな走り方を覚えろ。」と言われました。信太朗お兄ちゃんにも同じように聞いてみると、うでのふり方や足の着き方などを優しく教えてくれた。ぼくからすると潤乃介お兄ちゃんはきびしいかんとくの様で、信太朗お兄ちゃんのかんとくの言葉をかみくだいて教えてくれるコーチのような存在です。二人がいてくれるのでどんどん走るのが速くなってきたように感じています。でも、僕は短距離よりも長距離が得意なので、二人のアドバイス

が必ずしも当てはまりません。なぜなら、短距離と長距離では使われる筋肉が違うからです。主に短距離では速筋というすばやく収縮する事ができる筋肉で、一しゅんの力をはつきするときに使われます。しかし、大きな力をはつきする反面、持久力がなくなつかけやすい筋肉です。ち筋は、ゆっくり収縮する筋肉で、強い力をはつきすることができませんが、一定の力を長時間はつきする持久力がありつかれにくい筋肉です。お兄ちゃんの持っている速筋と違い、ぼくはち筋なので、ぼくの気持ちなんて分かりっこないと思ってしまう時が時々あります。ですが、こういう知識を与えてくれたのはお兄ちゃんたちなので、感謝しています。お兄ちゃん二人の経験からアドバイスをもらえるぼくは、とても恵まれています。もっともつとタイムを縮められるように、たくさんお兄ちゃんに甘えたいです。

ぼくの夢を応援してくれるお母さん

石川小学校 六年 小林 穂希

「たとえ辛い時も、信じていれば夢は叶う。」
お母さんは、いつもそう話してくれる。

ぼくの夢は、自分のお店を持つことだ。そのお店は「カフェ」だ。

幼稚園の頃、「カフェ屋さんになりたい。」と話した時、お母さんは聞き間違えていたみたいだね。ずっとカフェ屋さんだとは思っていなかったね。いろいろなカフェ屋さんに連れて行ってもらったことはいい思い出よ。

そして、カフェ屋さんではなく、カフェ屋さんだと気付いてからは、二人でいろいろなお店を調べてカフェ巡り。ぼくが、興味をもったことは、全て経験させてくれた。「コーヒーはどうやっていれるんだろう。」とぼくが疑問に思うと

「それじゃ、道具を調べてみよう。そして、必要な道具をそろえよう。」と、一緒になって調べてくれたね。ドリッパーやコーヒーマーバー、コーヒ

―豆等、いろいろそろえてくれたね。豆の産地、焙煎、ひき方によって風味が変わることもわかったよ。お母さんと一緒にいろいろ調べて、夢に少し近づいた気がしたよ。でも、「途中でぼくの気持ちが変わってしまうかもしれない。それなのに、どうしていつも全力で応援してくれるのだろう。」と思ったことがありお母さんに聞いてみた。お母さんは、こう話してくれた。

「穂希が夢に向かって頑張る姿はキラキラ輝いていて、かっこいいんだよ。お母さんはその姿を最後まで見ていたいし、途中であきらめたとしても、そこまで頑張った穂希を誇りに思う。」

その言葉を聞いて、胸が熱くなった。そして夢を叶えるという気持ちが強くなったよ。

将来、お店を開いたら、一番最初のお客さんはお母さんを招待するね。ぼくのキラキラ輝く姿を見ていてね。

ぼくは、夢を追って前に進み続けます。

自慢のおばあちゃん

石川中学校 一年 根本 彪正

「お帰りなさい」、いつも僕が帰ってくると笑顔でそう言ってくれる。

僕には、おばあちゃんがいる。今は、家で理容室を営んでいる。優しくて怒ると怖いふつうのおばあちゃんだ。ぼたもちを作るのがうまくて、とてもおいしいのだ。いつも自転車で行くときには、僕が見えなくなるまでずっと見ている。帰ってきたときも外に出てずっと待っている。いつも見守ってくれていてうれしい。しかし、ずっと前から夜は、一人でさびしそうなのだ。僕が幼い頃におじいちゃんが亡くなり、それからはずっとさびしそうなのだ。だから、たまにおばあちゃんの所に行って少し話したりしている。しかし、さびしさは変わらないようだ。しかし、最近は地区のお年寄りのグラウンドゴルフをいつも楽しみにしている。畑では、毎年色とりどりの野菜を育て、毎

日畑仕事をがんばっている。少し明るくなってきた。てよかった。そして、みんなで集まるときには、いつも以上の笑顔だ。去年の小学生最後の夏休み、神奈川県からいとも帰省し久しぶりにバーベキューをした。みんな楽しく話しているともう8月なのにキラキラと光るホタルが飛んでいた。「珍しいなあー」とみんなで見ていた。その後、また話をしているとおばあちゃんが変な話をしだした。何を話しているのかさっぱり分からなかった、でも笑ってしまう面白い話だった。そして、おばあちゃんが今までに見たことのない笑顔を見せた。するとお父さんが「じいちゃんにそっくりだな!」と言った。おばあちゃんがあんなに笑ったのは、もしかしたらホタルのおかげかもしれない。おじいちゃんはホタルになって、おばあちゃんを笑顔にしようとしてとりついたのかもしれない。ありえないことでは、絶対はないと思う。それは、亡くなって姿が見えなくなってしまうって、でもいつまでも妻には幸せにいてほしいという

夫の熱い愛だと思う。あの日からは、前より笑顔が増えた。お父さんは、「おばあちゃんは、お前が産まれてきてくれたことうれしいんだ」と言う。

僕は、三兄弟の中で一番先に産まれた長男だ。けがをしたときには、とても心配してくれて、大会でいい結果を出したときは、自分のことのように喜んでくれた。僕のことを愛し、ときに厳しく、それは「自慢のおばあちゃん」だ。お父さんとお母さんを支え、一家を支え見守ってきた。

そして、おばあちゃんいつもありがとう。これからめいわくをかけるかもしれないけれど、僕のことをこれからも見守っていてね。そしておばあちゃんは一人じゃないよ。いつもおじいちゃんが天国から見守ってくれているからね。

お母さんへ

石川中学校 二年 國井 海鈴

「いつもお母さんは味方だよ。」時々お母さんが私にかけてくれる言葉です。

私は小学校六年生の後半、新しい中学校に行くのが怖くて仕方ありませんでした。先輩たちは優しいだろうか、先生は優しいだろうか勉強についていけるだろうか、色々な不安がこみあげてきます。私の知らないところで悪口を言われていたらどうしよう、と毎日のように思っていました。そのときにいつもお母さんはそばではげましてくれます。お母さんも毎日仕事や子育てで辛いはずなのに。悲しい顔など一切見せずにいつも笑顔で家族の笑顔の一つになるような存在のお母さん。私はお母さんのおかげで今の学校生活が楽しめていると思います。中学校になってからもくじけそうになることがあります。例えば、はじめての陸上大会で思うように結果が出ず、落ちこんでいるときも、「今日がはじめてなんだから仕方ないでしょう、次がないわけじゃないんだから。」と優しく言ってくれます。私はそんな簡単に言えることで

はないと思っています。お母さんだからこそ言えるのではないかと私は思います。そんな風に私はなりたいと心の底から毎日思っています。友達とけんかした日や先生におこられた日などは「お母さんはそんなの毎日だったよ。やっぱりお母さんに似てるね。」といつも笑って返してくれます。それが私にとって唯一の支えです。いつもいつも反抗的な態度ばかりとってこまらせているかもしれませんが。でも毎日気づいたら笑ってて、笑わない日なんてないんじゃないかと思うぐらいお母さんのおかげで毎日がにこにこで過ごせていると思います。中学校の入学式前日にお母さんから言われた言葉があります。

「新しいところに行くのってとっても怖いと思う。けどね、新しいことにも挑戦できるチャンスなんだよ。」

この言葉が今でも忘れられない言葉になって心に残っています。いつまでも一緒にいるとは限らないけれど、本当にこれだけは言えると思います。自慢のお母さんだってことを。いつもありがとう。大好きだよ。

祖母はアーちゃん

石川中学校 三年 金澤 怜也

僕の祖母は八十一歳。毎日、家事をしてからお店の掃除、そしてシャツターを開ける。お仕事は、子供服店と自転車店の店番。お客さんは、お茶飲み友達と自転車修理に来る高校生のお兄さん達。定休日はない。休みは病院通院のときのみ。この生活を五十五年続けているのだ。現役バリバリ働き者のスーパーおばあちゃんだ。祖母のお茶飲み友達に僕が赤ちゃんで祖母におんぶしているころからお店に来ていて知っているので、僕を見ると「れいくん大きくなったなあ。」と言う。僕の成長を祖母と一緒に喜んでくれる、とてもいいお客さんのお茶飲み友達がたくさんいる。祖母の携帯電話の登録には、男子高校生がいっぱいだ。自転車修理に来るサッカー部や野球部の高校生達からしよっちゅう電話がかかってくる。「うん、うん、わかった。じゃ七時半に店

開けて待ってる。気をつけて来なね。」ととても親しげに電話で話している。高校野球やサッカーの試合がテレビでやると、名前を呼んで応援しまくっている。負けると「内田君がかわいそうだ。なぐさめるか。」と言う。本当にまるで友達だ。

僕は祖母を「アーちゃん」と呼んでいる。おばあちゃんのあなのか、名前の昭子のあなのかは分からないが、いこたちがアーちゃんと呼んでいるから、自然と僕もそうなった。アーちゃんに手紙を書くことなんてあまりないので、これをよい機会に改めてアーちゃんに日頃のありがとうを伝えたい。

アーちゃんへ お母さんが仕事するとき、朝から僕の好きなカレーを作って、僕の帰りを待っていてくれてありがとう。アーちゃんのカレーは僕の大好きな肉が大きくてすごくおいしいよ。僕が帰ってくる前に部屋が寒い時は、暖房を入れて暖め、暑い時は冷房を入れて涼しくしてくれてありがとう。おかげで家っていいなって思えるよ。僕が脱いだ制服を

きれいにたたんでくれてありがとう。「ぐちゃぐちゃにしないで。」と、お母さんにおこられなくて助かるよ。

僕は大雨が降ると、隣が川なので、一人で大丈夫かなと心配になります。一緒に住めばいいのと思っていますけど、アーちゃんは仏だんに勲じいちゃんがいるから南町がいいと言うね。僕は勲じいちゃんにお線香をあげたときは、かならず「アーちゃんを守ってね。」とお願いしているよ。最近腰が痛いと言っているアーちゃん、「怜也が勉強がんばっているから、アーちゃんもリハビリがんばるからね。」と治すためにリハビリがんばっているね。

いつも僕を励まして応援してくれてありがとう。これからも健康に気をつけて、無理をしないで自分のペースでお仕事がんばって下さい。そして長生きしてね。

私の二人のじいちゃん

福島県立石川高等学校 三年 吉田 彩香

じいちゃん。じいちゃんは今、元気ですか。好きなことをできていますか。私や弟などの孫の笑い声は聞こえていますか。もし今、じいちゃんが生きていたら、一回でいいから会いたいです。

父方の祖父は父が高校生のときに癌で亡くなりました。私が生まれるずっと前に亡くなったので、私はじいちゃんが一人しかいないのが当たり前だと思って過ごしてきました。でも、部活動の大会のときに思い浮かべるのも、パワーを与えてくれるのも亡くなったじいちゃん。私は勝手に、じいちゃんがどこかで生きていると思っています。じいちゃんが一人しかいなくて寂しい思いをしたことはないから、安心してほしいな。

私には母方の祖父しかいないので、私にとって唯一のじいちゃん。じいちゃんは私が生まれた頃からずっと可愛がってくれるね。そんな、私にとって唯一のじいちゃんは半身不随。デイサービスに通って

はいるけど、家で過ごす日もあるからちよつとしたサポートが必要だよね。一緒に住んでじいちゃんのサポートをしている伯父も祖母も年齢的にはもう若くないし、体力的に限界なはず。そんな姿を幼い頃から見ているから、誰も悪くないけど老老介護という状況をこれ以上してほしくないし、今よりも辛い思いをしてほしくない。だから私は、介護福祉士になる道を選びました。今まで目標も夢もなかった私に夢をくれたのはじいちゃんです。「半身不随じやなかったら一緒に走れたのかな」とか「杖なしで歩けたら一緒に階段を登って、高い所に行けたのかな」とか思ってしまうこともあるけれど、今の姿が私の唯一のじいちゃん。ちよつとだけサポートが必要なのが私の唯一のじいちゃん。右利きだったのに右半身が麻痺しちゃったから、左利きに変えて毎日を過ごしているのが私の唯一のじいちゃん。どんな姿になっても、私のことを忘れてしまっても、私はじいちゃんのことはずっとずっと大好きです。大好きで居続けます。

じいちゃん、私に夢をくれてありがとう。夢を叶

えるために高校卒業後は進学をします。進学をして、介護福祉士の資格を取るから。資格を取得して、介護福祉士だって名乗れるようになる日まで生きてね。私が夢を叶えたら、一番最初にサポートさせてね。私はそれを目標に頑張ります。そして、天国にいるじいちゃん。私のことを見守っててね。じいちゃんやんが癌で亡くなったことが、福祉系に進もうと決めたもう一つのきっかけです。二人とも信じててね。本当は直接言えたらいいんだけど、難しいし恥ずかしいから手紙で伝えます。ありがとう。

【優秀賞入賞者】

「だいすきなままとばへ」
「みずはちゃんへ」
「おいしいおべん当ありがとう」
「ひいじいちゃんへ」
「ばあちゃんへ」
「おばあちゃん」
「お父さんへ」
「父さんへ」
「大好きなときばあちゃんへ」
「優しい祖父母」

石川小学校	一年	小湊	結衣
石川小学校	二年	関根	悠仁
石川小学校	三年	矢内	快音
石川小学校	四年	目谷	美月
石川小学校	五年	郷	柚月
石川小学校	六年	小野	航聖
石川中学校	一年	角田	紬
石川中学校	二年	我妻	侑弥
石川中学校	三年	中島	美紅
福島県立石川高等学校	三年	小山田	妃那

【優良賞入賞者】

「おとうとのはやとへ」
「わたしの妹、きらちゃん」
「お母さん、ありがとう」
「お父さんへ」
「ぼくを支えてくれるお母さん」
「ありがとうお父さん」
「なんでも宇宙一のお母さん」
「お母さんの力」
「ばあちゃんへ」
「大好きな人」

石川小学校	一年	長谷川	大和
石川小学校	二年	石井	麻絢
石川小学校	三年	遠藤	空
石川小学校	四年	和知	悠都
石川小学校	五年	永沼	大地
野木沢小学校	六年	水野	優結
石川中学校	一年	陣野	来々
石川中学校	二年	曲山	麻稀
石川中学校	三年	富岡	由愛
福島県立石川高等学校	二年	佐藤	徠夢

【郵便局長賞】

「じまんのばへ」
「ぎゅってあったかいまほうだね。」
「大すきなあんちゃんへ」
「私の家族」
「わたしのじまんのばあへ」
「手から伝わる家族のきずな」
「生まれてきてくれた弟へ」
「親の心」
「ごめんねとありがとう」
「母へ」

石川小学校	一年	薄井	晴向
石川小学校	二年	高橋	由依
石川小学校	三年	山本	樹
石川小学校	四年	太田	結梨
石川小学校	五年	曾根	奈歩
石川小学校	六年	岩下	優空
石川中学校	一年	圓谷	心葵
石川中学校	二年	大和田	一仁
石川中学校	三年	渡邊	眞奈
福島県立石川高等学校	三年	矢吹	瞭磨

令和6年度 家族への手紙コンクール最優秀賞作品集

石川町青少年健全育成推進協議会 石川町教育委員会

〒963-7852 石川町字関根 165 石川町教育委員会生涯学習課
電 話 0247-26-2566 F A X 0247-26-4992

